大切な、たからもの

横根藤井神社祭礼が、今年も始まる―

まつりばやしの大太鼓や笛の音に混ざって、
山車を引く掛け声が響く。
いつもの静かなまちとは大違いだ。
おはやしのこどもで満員の山車が、
ぎしぎしと軋む音を響かせながら、
アスファルトをしっかり踏みしめて進んでいく。
「もう少し右寄れ！」
「止まれーっ、止まれーっ」
「方向変えるぞー！」
「せえーのおっ！」
そろいの法被を着た大人たちが
山車の梶棒を担ぎ上げると、
ぐらり、と山車が前に傾いた。
そのままぐるりと向きを変え、梶棒が下りると
山車はまた、ゆっくりと進んでいく。

「おお、いよいよだな」
「まあ天気がええで良かったわ」
「先週やった山車の組み上げも、晴れたでほんと良かったなあ」
「まあしかし毎年のことだけど、大変だったな」
「みんながおるで、やれるだわ」

10月の晴れ渡る空の下、3台の山車が連なって、境内に向かってくる。

細い小道いっぱいに山車と人があふれ、大きな掛け声におはやしの笛太鼓、山車の軋む音が重なって、こだまする。

このまつりは、横根地区の「石丸組」「中組」「南組」で行う、秋一番のおまつりだ。

「今年の『端車』はどこだ？」
「中組だわ」
「ほいじゃ中組が式三番叟か。どこの組もひと月以上稽古するらしいじゃん」
「うちの組の三番叟やる子も、よう頑張っとったぞ。あとでよく褒めたらなかんな」

今日は朝から、山車の巡行、子供三番叟、巫女神楽、くす玉割り、こども獅子の祝い練り、餅投げなど、奉納行事が目白押しだ。いい一日になる。

前日にきれいに掃き清められた境内には、まつりを知らせるのぼりがはためいている。本殿には紫の幕が掛かり、床には赤い毛氈が敷かれ、祝いの一日を待っている。

「なんにせよ、こんだけ人が来て、一緒にやれるまつりはええな」
「面倒くさいだの何だの言いながら、まあ今日は、うちの婿さんもがんばってくれとるわ」
「ありがてえがや」
「ほんとだわ」

端車　3台の先頭となる山車。毎年輪番で交代し、この車の組が「式三番叟」を舞う。





どうなる、組み上げ

まつりを半月後に控え、石丸組では、他の2組より一足早く山車を組み上げ始めた。例年は完成した山車を保存しているので、飾り付けだけの軽めの作業だが、今年は修繕で解体したので、ゼロからのスタートだ。説明書はなく、歴代の資料やアルバムを見ながら組み上げる。高さは6・3㍍、部品は三百点を超える。遠山さんはずっと気をもんでいた。

保存会と祭総代、組の人90人ほどが、軍手を手に集まった。経験者が若い人と一緒に山車の骨組みによじ登り、地上から一つずつ部品を受け取り、屋根や彫刻をはめ込んでいく。

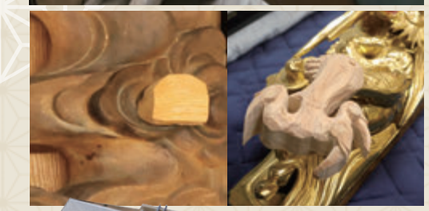
「地元にないのでやってみたかった」という、他市から転入し、参加した曽川智貴さん。山車の彫刻や当日先頭が持つ梵天をみんなと一緒に準備している。初めて会う人たちとも、作業を通して知り合いになっていく。

刺しゅうを施した赤い幕を取り付け、山車の準備は終盤を迎えた。

組み上げの様子を、いとしげに眺めていた高齢の男性。年が大きくなり、山車の上での作業は難しいという。最後に立ち上がると両手に提灯を持って、山車の正面に飾った。

―ようやく、完成。みんなが汗を拭いて、その姿を見上げている。







制作した彫刻師の息づかいを残したい

石丸車の鳳凰や唐獅子牡丹といった彫刻を修繕する、朝倉堂の彫刻師・間瀬瑶翠さん。縁起物は時代を反映すると話し、これは江戸情緒あふれる意匠だという。小さな部分まで手が込んでいて、制作当時の彫刻師が、腕によりをかけて仕上げたことがうかがえる。

大型だが繊細な彫刻に、どうやら過去にボンドやペンキを塗ったような跡がある。まちの人が手当てしたものらしく、間瀬さんは「まつりの喧騒と苦労が垣間見えますね」と苦笑する。

彫刻を洗浄し、元の状態に戻してから、修復部分を彫っていく。間瀬さんは「木目や刃跡をよく見て、制作した職人の思いを再現させたい」とこだわりを話す。

修復を終えた彫刻には、当時の空気が呼び戻されていた。





300年、山車はまちのよりどころ





このまつりの主役の一つ、山車。まつりの日、各組ごとに力を合わせて走らせる、木造の大きな車だ。3台の制作は江戸後期。当時の技術が詰まっており、大切に守っているが、経年劣化は進む。毎年のまつりに加え、近年は市の催事への長距離の巡行も行って、振動や方向転換で足回りが弱ってきた。「車の心棒(車軸)が割れてねえ。まあ直さなかん。まちの大切な宝だし、みんなの心のよりどころだもん。まつりが安全に続けれるようにちゃんと修復せんとね」

石丸組保存会の会長・遠山敏明さんが話す。2026年初夏、石丸組の山車「石丸車」は、車部分と彫刻の修復作業を行った。組み上げで彫刻に欠けなども起こり、思い切って市と国の文化財の補助金を申請し、修復に踏み切ったのだ。

時を超え、山車も地域で生きていく

石丸車は、山車を中心に彫刻や修復を行っている「朝倉堂」(半田市)で、修復作業に入っていた。工場では、大工の渡邉裕之さんが、新しい心棒を制作して待っていた。素材は、固くしなりのある樫の木。現代では鍬の柄などに使う細いものが流通しているので、真っすぐ太く育ったものは少ないという。

山車の土台となる台輪の部材は、制作当時のものだ。数百年の樹齢だが、横根地区は古くから集落があり、近くに植わっていたものかもしれないという。何百年もの時を越え、新しい木とともに形を変えて、山車もまた、同じ場所で生きている。



わたしも、こうして教えてもらった

日本の芸能の中でも格式が高く、こけら落としなどで奉納される祝いの舞・三番叟。天下泰平などを願う「子供三番叟」を、各組で選ばれた小学生が舞う。それぞれの地域で、こどもたちが1カ月ほどにわたって稽古し、謡(うたい)・はやしと息を合わせて舞を奉納するのだ。中組は今回『端(はな)』として、「式三番叟」を3人で奉納する。

別世界へ、連れていく

『ああら　めでたやな』

稽古初日。台本には、なじみのない言葉が並ぶ。動きもすごくゆっくりだ。不安げな3人の様子を見て、指導者のひとり、山口寿美子さんが「ちょっと扇子さばきを見てもらおうか」と声を掛けた。

パンッという音をさせて扇を開くと、一瞬で鮮やかな色が現れた。3人が目を見開く。スイッチが入った。

もう少し腰を下げて、背筋を伸ばしてと、指導者の加納紘子さん、大嶋さち子さんらも一緒に動きながら、一つ一つ修めていく。謡との息合いで成り立つ舞。

稽古では、指導者たちが実際に舞に合わせて謡(うた)う。

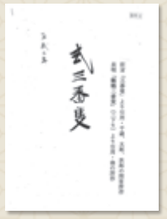
「毎日家でも練習してます。やったことのない動きばかりで、指先まで意識してないと、すぐ手が曲がっちゃう」と話す大嶋佑奈(ゆうな)さん(6年)。扇子や手足の動かし方が難しいと言い、休憩の間も一人で練習を続けている。

山口さんは、自身も小学生の頃に、三番叟を奉納した。「とにかく恥ずかしかった」と笑うが、その指導は真剣で温かい。湯川真啓(まひろ)さん(5年)・竹田昴(すばる)さん(4年)もその気持ちに応え、真剣なまなざしだ。

今日も、『おおーさいやー』と謡い始めが聞こえる。地域の大人たちが、こどもたちの成長に胸を打たれながら、真剣に一緒に舞台を作っている。



▲集会所に掲示している歴代の三番叟奉納者。明治39年以前の記録はないが、江戸時代には始まっていたという。戦争や伊勢湾台風、コロナなどの中断を越え、歴史をつないできた。

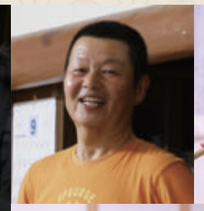





▲中組の式三番叟の教本(左)とはやしの楽譜(右)。三番叟は教本のほか、過去の映像も参考にするようになったという。組によって、謡や舞、はやしの調べも異なる。中組三番叟の謡は「おおさいや」から始まるが、「おおさえ」と謡う組もある。








僕も同じだったよ

三番叟の稽古の後、集会所に笛を持った小学生たちが集まってきた。次はこどもばやしの稽古だ。

「みんな久しぶりだな、一年ぶりだけど、曲、覚えてるか？」

指導者の大嶋幸治さんが聞くと、こどもたちが「おぼえてなーい！」と笑う。ピーピー、ドンドン、締め太鼓や篠笛(しのぶえ)の大きな音が響く。

若者が楽譜を指差しながら、太鼓の打ち方を、こどもに丁寧に教えている。自分が小さい頃にしてもらったのと、同じように。

6年の水野桃子さんは言う。

「これで卒業。これからもおはやしは続けたいな。楽しいもん」







まつりの日、こどもたちは稽古の成果を披露する

舞台の上では、一人だ。
でも、同じように舞台を踏んできた
先輩たちが、見守り、応援している



おおい、手え、貸してくれ

各組で山車を組み上げ、三番叟の衣装を合わせた稽古も終えて、2日後にまつりを控えた金曜の朝。

本殿の前には白い石が敷かれ、まぶしく光っている。氏子総代の6人の男性が、大きな布や板などを抱えて倉庫と境内を何度も行き来している。まつりに向けて境内を清め、のぼりを掲げる準備をしているのだ。

「こっちだ、ロープを持ってくれ」

のぼりをしっかりと固定する。先端に付いたヒノキの枝は、神様への目印らしい。引き上げは、紐を引く人、布をたぐる人と、4人がかりだ。するすると昇っていく真っ白な布が、青空によく映える。

「のぼり、きれいでしょう。こないだ新しくしたんだわ。見て見て、奉納者の名前いっぱいあるでしょ。あそこに僕の名前もあるよ」

一人一人がここを守る大切な人だ。

「このあと、本殿に紫の幕を付けて、提灯も飾って、もっときれいになるよ。楽しみにしとって」

いよいよ、まつりだ。みんなの掛け声が聞こえてくる。





まつりは
まちの人とともに歩んできた










わたしのまちのまつり

市内の他の地域でも、人々の手で大切に守られ、紡がれているまつりがある。

4月に吉田町で行われる「半月七社神社おまんと祭り」。境内に作った柵の中を、鈴や鞍を付けた飾馬が走り、その首に飛びついて一緒に駆けるまつりだ。馬の鈴が鳴り、柵の内外から掛け声が飛び交う。豊作を祈るこのまつりを、地域の人たちは大切に守ってきた。

おまんとに参加できる「若連」は中学生から数え24歳の厄年まで。男子のみが参加する習わしだったが、25年から女子の参加を地域のみんなで決めた。馬と駆ける20歳の娘を応援する父親がいた。その声は、少し誇らしげだ。

「私たちも参加できるようになったから」と、嬉しそうに話す中学生がいた。「おまんとはまだ怖くて、今回は太鼓を叩きます」。今年は裏方として、朝5時に友達と一緒に来て、みんなの朝食に炊き込みご飯を作ったという。まちの一人として役割を担い、その表情は少し大人びて見えた。



若連最後の年となった村上孟駿さんは、幼い頃からこのまつりを見てきた。今回は仕切り役に回り、若い参加者にこの楽しさを体験してほしいと話す。

大人たちからこどもたちへ。自分たちが若連だった頃の楽しい思い出を、経験させてあげたい。その思いが、まつりをつないでいる。

まつりの、これから



知るとすこし、好きになる

「来た、来た」と、中組保存会・会長の大島利廣さんが手を振る。黄色い帽子の行列が集会所にやってきた。小学2年生が、校外学習で藤井神社のまつりの話を聞きに来たのだ。

大島さんが、同じ学校で過ごす3人が式三番叟を舞うことを話すと、こどもたちから「知ってる」「見たことあるよ」という歓声が上がる。「まつりを知って、来てみようか、三番叟やおはやしをやってみようか、と思うこどもが増えるとうれしいです。ずっとまちの人で続けてきた地域の宝だから」と大島さんは言う。

まつりが人を結んでいる

まつりの運営に尽力している、それぞれの組の保存会の人々。

古くから関わる人だけではなく、中組の大島さん・石丸組の遠山さんは、「サラリーマンだったので、まつりに関わったのは退職後」と話す。定年後、家族の勧めなどを通じて、役員・祭総代を担った後、保存会に入ったという。遠山さんは市外の生まれで、結婚を機に転入した。山車の組み上げに来ていた人たちの中にも、市外の出身だという人がたくさんいた。

まつりを中心に、まちに元からいた人・新しく入って来た人が、ごちゃまぜになって、ゆるやかな渦になっている。

「まつりの準備は正直大変だなって思うことはある。でもね、いろんな人の声が励みになるんです。まつりはやっぱりいいですよ」と、大島さんはほほ笑む。

その役割とこれから

まつりの未来

まつりは、まちの未来づくりの役割も担っている

横根藤井神社の祭礼は、準備に苦心しながらも人が集まって、良いものを見せたいと努力を続けています。山車という財産があることで、人がまとまる機会もあります。また、3つの組の住人が、時には良きライバルとして刺激し合い、互いに高め合いながら継承している点にも価値があります。準備に苦労し、時には不満が出ることもあるでしょう。それでも人々が関わり続けていることが「まちの宝」なのです。まちにまつりが根付いている証拠とも言えます。まつりは、人々が顔を合わせ、力強いまちを築くことのできる貴重な機会です。

一方で、まつりの継続は全国各地でも大きな課題となっています。まつりを知ってもらい、作業の内容を変えたり、参加への枠組みを変えたりなど、その思いを紡ぐ人の輪を広げることは、大切な活動です。まちの未来を作ることにもなります。

伝統とは、変えないことではなく、本質を捉えながら、後世につなげていくことなのだと思います。



國學院大學　観光まちづくり学部
観光まちづくり学科　教授
小林　稔さん

大切な、たからもの

そ大こ そ面知そい徐守毎ま
まちの大人に見守られて、成長していくこどもたち。
毎年変わらぬまつりの中で、
守られる側から守る側へと、
徐々に役割を変えながら大人になる。
いくつもの世代が見守り、見守られて、
その連鎖でまつりが成り立っていく。
知らない人が知っている人に変わっていく。
面倒だなと思ったり、文句を言ったりしたっていい。
それでも、人が集い、一緒にがんばるこの非日常は、特別だ。
この気持ちを、味わってほしい。次の世代の人たちにも。
大切な宝物。
それは、ここにいる人たちなのだ。

特集「大切な、たからもの」　企画広報戦略課　0562(45)6214